

ヨッヘン・シュミット 著

『ピナ・バウシュ』

― 怖がらずに踊ってごらん ―

(谷川道子訳 フィルムアート社)

本書は、現代ドイツの神話的存在とも呼ぶる舞踏家ピナ・バウシュの人と作品についての評伝である。作者ヨッヘン・シュミットは、現代ドイツを代表する舞踏ジャーナリストであり、その神話の創生と展開に身近で接し、また、その生成に大いに寄与もした。ピナ・バウシュは、格好の批評家を持ったことになる。本書では、ピナ・バウシュの人となりと彼女の作品がいれば現場で写し取られている。これも方法としては、当然のことといえよう。なぜなら、ピナ・バウシュの世界は、ワーク・イン・プログレスにおいて成り立っているのだから。批評家の現場の人としての特性と能力が目覚しく生かされている。

だが、当方にとって気になるのは、評者の対象に対する距離感である。この評伝はその距離があたう限り小さいところで書かれているので、ピナ・バウシュという神話成立に大いに寄与している。具体的な出来事や場面の描写がそのものを伝えずに、か

えって神話としか言いようのない幻想的イメージを生み出すのである。これは、いろいろな問題をはらんでいる。第一に、表象の芸術は、直接的なものであつて、それを見て体験するにしくはないということ。ピナ・バウシュを知るには、それに接していなければならぬ。第二に、その批評の言葉は、幻想を作り上げる。シュミットは、真実の姿を伝えるべく自らの知り得た最大限の具体的な細部を提示する。だが、これが逆説的にも幻想的なイメージを喚起してやまない。聖なるものに転化されているといつてもよいだろう。そこからひとと、ピナ・バウシュという神話に惹きつけられることであろう。この評伝は、一方でそのような神話形成を行いながら、まさにそれゆえに真実そのものは、知らせてくれない。これは、この批評文の功績でもあり、限界でもある。

ピナ・バウシュを焦点化するのに本書が有効なのは、そのやり方がその芸術の本質に直結しているからだ。それは、プロセスとしての作品形成ということであり、それがまた、芸術家の生き方そのものでもあるということだ。ピナ・バウシュ本人は、評

者は、ここにドイツの芸術の特性を感じざるを得ない。形式の美を志向するのはなく、人が生きるというプロセスを何よりも重視する。ひとが美と呼ぶならば結果として、そして痕跡としてのもの以外にはない。シラー以来の近代ドイツ美学の哲学史上での挫折を思い浮かべずにはいられない。ピナ・バウシュは、ダンスとも演劇とも一概に言えぬタンツテアターというジャンルを作り上げたのだが、それはまさにプロセスを通じてであった。メンバーへの問いかけ、そして、メンバーからの問いかけに最大のエネルギーを傾注しているように思われる。肝心なのは、答えではないかもしれぬ。そして、その芸術は共同的・協働的プロセスをあらわにすることでもあった。場合によつては、それが団員たちに精神治療的な効用を持つたというようなエピソードも語られている。二十世紀後半もこのような、きわめて人間的な、あるいはあまりにも人間的な芸術に、それもひとつの神話として、ひとは、惹きつけられてやまぬ時代であつたといえそうである。

(平野篤司)